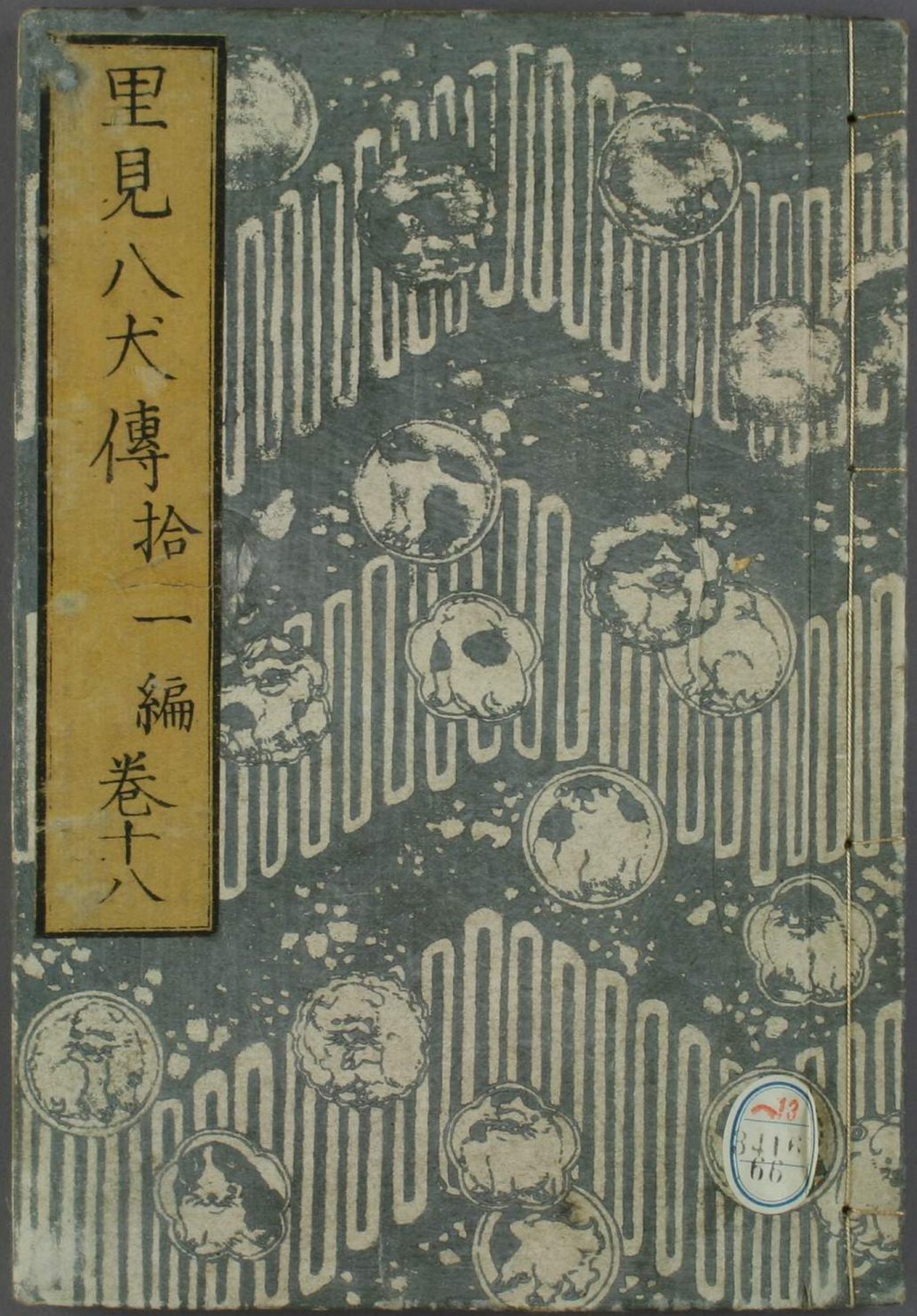
里見八犬傳拾一編 巻十八



13
3416
66

13
34.6
66

十一編南総里見八犬傳

十八

東京都立図書館
特別文庫室

南總里見八犬傳第九輯巻之十八

東都　曲亭　主人編次

第百二十四回　師命を守りて星額遺骨を齎し　殘捨を受て齋僧禍鬼を告ぐ

文明十五年。癸卯の四月十六日。大法師の宿願成就して。下総國結城郡城西と雪えたる。古戦場の草庵ゆゑ。嘉吉の義死の里見氏。幼ゆ春王安王両公達城主結城氏朝を首ゆゑ大塚近作三成井丹三直秀。們當日戦歿の忠將義士の諸霊魂の菩提の與ゆ獨坐不退の常念佛の結願供養を遂んとまた則是五十年忌の前修ふて。嘉吉元年辛酉より今ゆ至て四十三年。念佛修行の其創より八十許日ゆ及る。本日ハ即那諸將士の祥月亡日ゆえ。ゆゑ程ゆ大塚信乃犬山道節犬川莊介犬坂毛野犬村大角犬飼現八犬田小文吾們の七犬士の里見殿の代香使。蜑崎十二郎照文副使。妙雪代四郎與保と共

伴ふ照文の伴當と八個の野兵を相従へて。六の月辰の初刻より。大庵へ参會を祈る。那某甲の院の住持長老と九個の徒弟を相俱して来りて庵中に在り。庵主と副ひて。経巻讀誦の最中なりければ照文と天士行は持ち来る圓坐を庵前なる樹下に各分ちて布き坐して讀経の果るを程なく昨宵照文が吩咐する經紀児行は精米數十苞と永樂錢七八十貫文を俱に數輛の車子に積て連り推させて来ける照文とそを是を見て伴當行に受取しと經紀児をかへりみ施行は人別に米一斗と錢百文と相定めて伴當行に示す。その日の為に准備せる白麻の幕七八張を。大庵の檐下より直直に供養塔の頭まで左右なる樹木と片倉なく透間もなく張亘し。且両道の席幾枚狹長くして中央に布しるべを准備送りて整ひしかば八個の野兵を身甲に各々肱指臑甲なるを少く捍棒を衝立て分れて非常を警戒する。勿論侍品は礼服なる照文は長袴大士は肩衣半袴を俱に綿の夾衣晴れふ小腰刀を帯びける然ばいまだ

代四郎も麻社衣を被れども施行の折の頭人なるべしそ錢を領ち来て料る配とのそれを。はふ直塚紀二六宰領して約莫その義を相與る伴當都て立挿して准備暇なりけ。低而已牌左側に早朝廻向の讀經果しなべ。大法師は衆僧と俱に徐に草庵を立出て石塔婆を距ること六七尺なる儲の胡床に着けける身に白栲の夾衣に香染の法衣黒綸子の袈裟披てるに拂子を執りたりけるその容素朴にして松體竹心仙骨見まと最も尊くぞ見えける。相從ふ法師行は十口都て一樣に長老沙弥の差別なく皆緇衣被て白紗綾の袈裟なるを左右両側に排立て更に供養結願の讀經に梵唄和讃の妙音に聴者齊一心耳を澄し木魚鉦磬の響呂律に叶ふく天樂花を雨るの祥瑞あり。宝器云ふ足らねども其式を失はず衆徒実に堅けれども深信猶餘あり供養の讀經復一時許既に讀果しなべ。大法師は宝座を立て過去七佛を唱名膜拜まそまろ遂に諷誦の願文を聲爽に諳讀まその文に曰へら。

婦幼の輿に假名をまじへて綴りたり作者の本意もまた
意はあらぬ事ども実に已とせざるべからざるなり夫四恩必報ふべし狼獺の不仁なるもこれ時として
天を祀り雛鶏の悪食なるも猶反哺の孝あるがごとし況倘人にして徳を思ひ恩に報ふの
心なくば禽獣にも曷ぞ及んや伏して惟れば嘉吉の擾乱君臣相克し五常地に拂て人心
猛獣と異なるぞ是時に當て獨結城氏の頗忠あり是をもく左祖義に仗る所の雄兵
遂に亦勘くなく見て肩の諸将恩顧の勇士故君両公子の奉為に妻子をもいれ性命を
擲ち甲兵孤城に據る處を慮に十萬有餘人四門の防禦矢石に富て畧六韜計拙
かるぞ篭城既に三年の久しきに及ぶよく堪て百萬虎狼の勁敵もその勢ひに乗ることを能へ
ざる雖然古語に不云乎人ヨクければ天に勝天定りて人に勝の時ありまさに至らねばやうに折れ
勢力に躓るに泊て君辱られ臣死せり玉石共に厮焼れて誰か一人も残るべき哀るべき義実
不肖にして當時父と俱に其城に在り城陷るの日遺訓辞ありて路を鋭く辟て堅き
破の命を東南の海隅に免れて神餘の與に逆臣を誅戮し且不義の両郡司麻呂

安西を討平げて安房の四郡を有ちしより以来民を撫るに仁を以て士を招くに賢を擇
ばず加之愚息義成孝にして且武畧あり是を以下風に立つ武士二千餘城遂に隣
國二総と并せて一方の藩屏たり是併先考威霊の守る所祖先の餘徳に依る者
也義実幸に良臣勇士の羽翼を得たり為とあらば創より遥に考妣両親の霊魂を
招くまつりて廟墓を平群の大山寺に建立し春秋の祭祀忌辰の追薦敢怠慢
あらじと雖今也戰世割据の列國猛虎々に横ぶり車馬を遠ざけ致さに由
なし是故に躬自其地に迫りて因恩に答へ徳を謝ぜんに吊祭の情盡さんに能ざる言に
舊臣二世の忠良金碗八郎大弘因恩を棄て為に入り寧因恩に報ゆと思欲しる
勇猛精進五戒を具足し且塵世に染着せず錫を飛して嶮岨を踰越し杖藪
行脚二十餘年近曽義実父子に代りて草廬を嘉吉の古戰場幽陰茂林の
中にトして三月不退の大念佛を勤行し遥に軍旨の臺を仰ぎて將に冥福を祈り多に

薦んとも義実灰ゐ之を聞く相憚て寝られざ因茲涅槃経三部盂蘭盆経五部隨求陀羅尼三巻を搨寫し奉り使臣蜜崎照文を齎して以供献焼香の奠礼を行ひむ吁佛弟子の功徳廣大無量迷津慈航の資なる胸月真如虚空かぞ其善念の投ぜ所上は有頂天ゐ届るべく下は金輪際ゐ融通して弥陀勢至観音の三尊俱ゐ降臨し五五の諸菩薩天部善神肩を比べて影向あり異香馥郁として金蓮葩を降し天外の音樂節奏の妙る鳳簫龍笛睡蛇を覚さび慶雲忽岫より起りて靉靆たる飛蛇の数萬の精霊必是三毒の火坑を長く脱離して巫ゐ無量壽の寶座ゐ遷り三十六天の仙室ゐ向ふ者して常寂光の樂邦ゐ遊んと乃至一闡提普く八正道ゐ赴くべと尓ゐ事由を本願の大檀那前治部大輔里見義實朝臣安房守兼上總介里見義成朝臣ゐ代り奉りて淨場修行の沙門、大行香使臣蜜崎照文等敬白とそ

誦し奉りける。登時蜜崎照文は七大士仏ゐ揖をして徐ろゐ身を起して塔婆の邊ゐ找む程ゐ代四郎紀二六ゐ召て安房より両侯の寄せ奉り経巻と香奠を両ゐ捧げ相従ふ。照文ゐ身邊ゐ措くを照文を受け奉る。塔前ゐ具る程ゐ代四郎と紀二六ゐ舊の樹下へ退けり。然バ又照文は塔婆ゐ朝し端坐して且石塔を仰ぎ看るゐ細工の精妙ゐ驚もゐ。第一の石壇ゐは義実王の先考妣季基夫妻の神主ゐ。その傍ゐ水二三斛を装る可き壺の網嚢ゐ容るゐ。ゐ何物の東西ゐ在を知らぬ。その次の壇の左右ゐ花を供へ水賻の水盤あり下壇ゐ香爐あり塔の四方る樹枝ゐ四箇の楮幡を吊して樹て。諸行無常是生滅法生滅々為寂滅為樂と。涅槃経る四句の偈を寫して照文隨即懐より。伽羅一裹を出て焚く焼香ゐ。額衝て拜を黙禱して。身を起して退けば大塚信乃立替りて找寄て焼香を。信乃ゐ大父大塚三戍及外祖。井直秀い忠義男義烈援群ゐ。

昔年結城落城の折戰歿の譽ある犬士の中。信乃を第一番の燒香とぞ達
せける信乃ハ懷舊の淚と倶に再拜して退ける次ハ道節莊介毛野
大角現八小文吾們立替々々次第を追て拜し訖れバ照文二ゝび机を出て代四郎
と共侶に私の燒香も亦程に、大法師ハ本処に退きて坐して連りに木魚をうち鳴し
十個の衆徒と異口同調に念佛數百遍唱へる聲淸喨と澄昇りて現寂滅
爲樂の偈句虛しかりと思ふ者なかりける。恁而諸士の燒香果しかバ、大法師ハ
衆僧と倶に唱名の聲を歇めて合掌して念ずらく。南無帰依佛南無帰依法
南無帰依僧三寶請誦し奉る。追薦冥福の諸精灵。故鎌倉の管領持氏朝
臣の兩公子。春王君安王君法號某院某大童子。云云二唱・里見治部少輔源季基
朝臣法號義烈院忠慈賢山大禪定門孺人嶋山氏。貞心院慈德如峯大
禪定尼當城の先主故下總判官結城氏朝朝臣法號某院某大居士春安

兩公子の小傳。大塚匠作三戍法號訓山栄后遺壁禪定門夫妻其子犬
塚番作一戍法號知命達德速逝禪定門孺人藤原氏諱ハ手束法號節
操如竹似松禪定尼信濃國人氏井丹三藤原直秀法號當覺自證以
眞居士。この它嘉吉の義兵忠戰陣歿の列將士卒修する攸の妙典及念佛の
功德に依て一蓮托生永劫極樂。子孫後榮施主繁昌南無阿彌陀佛南
無阿彌陀佛十念訖て更に亦結願の偈を唱て曰。

圓輪如輪歳月流　個中名利等浮漚　漫勞計較分呉楚
且任稱呼作馬牛　世事看來從理順　人謀怎似所天休。
要知平滅酬恩訣　念佛勤行成就秋　南無過去未来見
在三世諸佛菩薩。と唱訖れバ。帮助の長老も亦偈句を誦して曰
願以此功德　莊嚴佛淨土　上報四重恩　下濟三途苦

り。わそ。けゝのゝめ。若有見聞者。悉發菩提心。盡此一報身。同坐極樂國。十方三世一切佛。諸佛菩薩摩訶薩。阿耨多羅三藐三菩提と唱訖れば。從僧都て低頭して。供類は扨是ふ果ふけり。登時庵主、大法師の拂子と合掌く身を起して。照文の坐邊ふ來て。両舘より寄のゝ物。經卷並ふ香奠の鈔びを演るゞて。七大士ゆも口誼ゆり。却那壺と携て帮助の長老師弟と俱ふ照文を誘引立て。草庵へぞ退りける。這庵極めて陜けれい。十僧と一客のゝ這它は膝を容る處ゑ。その故ふ七大士は縁頰ふ席を布して。肩を比べ俱ふ坐り。帮助の長老ふ對面して。鈔を舒るゆも。獨犬江親兵衛ぞ這小集ふ飽うると送憾して。且孝嗣と次國太夫の噂をしつゝある程ふ照文は、大法師ふ。今日石塔婆ふ具措れし壺のゆゝと問けふ、大答て然いよ件の一義ふ問れぎとも。疾告なゝと思いるゞ。いまゞその暇を泊ぎ。大士達も听のゝとゝ。佛壇をえかへて。那壺は今朝這長老の携來て贈りゆゝ。先君季基朝臣の送骨と長老は這近邊る能化院の住持ゆく。法名は星額先住宝珠和尚の法燈を續ぎ。より。今朝啓筆く咨知ゆ。ゆゝ。師父宝珠和尚は昔季基朝臣と方外の交りあるゆゝを。季基陣歿ゆゝ。折首級を。ゆく。合る隱して亡體と共ふ煙ふ做し。然ども思ふ。ようあれべとく。壺は藏め秘措ぎく。後々ゆも葬らぞ。徒て居ゆの年を歴て。宝珠和尚遷化の折。今の長老星額師ふ送教ゆゝ。季基主の朽骨は。ゆく。那人の後なる者ふ贈れと思ふ。ゆく。ゆの年來秘措ぎ。是よりの後年の序。癸卯ふ于らん比必ず脚の僧有て。姑且ゆの地ふ杖を歇て。徒々の林原ふ莽を締ぶとゆらんそゝを里見の舊臣ゆれべ。汝悄地ふ我意を告て。件の送骨と附屬せよ。然ども正しく證據るくは疑るゝとも。我始より如右思慮り。季基陣歿の折ゆも。隨身の大刀一口あり。と送骨と共ふ秘し置ゆ。開ゆ。狙公と命けり。那家の名物ゆれば。知りてゆらんぞらん。汝ゆの義をよくせよと。叮寧ふ送託せられて。送骨の壺と那名刀と。合ゆ。遽與

ゆゑ〻とそ。徒而今茲の春より〻て。拙僧去の地ふ莽を締じて常念佛を修行あわ
ける。事情をいふまく欲星額長老ゆ知りぬ。て。僧ふ徒弟達を相俱して。我為ふ
石塔婆を。一夜の間ふ造り立て。法會の莊嚴を帮助ゆる。今日も亦早旦より。師
弟共侶ふ這里ふ來まして。始て件の來意を示して。先君の御送骨と。那名刀を拙
僧ふ授賜り〻のち。結願供養の讀經まで。助聲せれ。洪恩德義何事狹
又これふ勝ん。拙僧這地ふ來ゆ始より。季基公の墳墓のありゆやせんと思ふをして。普
く里人ふ尋問ひふ。竟ふ知るよしなり〻。ちゆ歎ずてのみありけるふ料ず善知識の德
義ふ依て。御送骨をゆるけ。欽び辭言るふ物もゆるぞ。是併我両館の御孝感の致
ふ所。拙僧が所以ふあらず。先ゆ件の名刀を拜見せられ。我言の錯ざると知られんのことをい
ふ。貽て狙公の名刀を拿ゆて。照文ふ遞與ふゆ。倶ふ聽く七大士及縁類の片隅ふ尻をうち掛て在り。代四郎まで。感嘆せざる者ゆなく。

宝珠和尚の智慧廣大なる。未來を知まる送囑の趣。又星額師の德誼尤実
共ふ沿難し。得〻て。一唱三歎異口同様ふ。一雨妻時稱えて已ざりけり。當下蛮崎
照文ふ狙公の大刀を受拿て。両三番うち戴ず七大士ゆもえせんとそゆをら。縁類の邊ふ
膝を找めて。皆共侶ふこれを看るふ刀の長ふ二尺ふ過ざる。その表裏ふ怎るりけん。鍔
きゝヨヲく。鎬朽ぬれば。鞘糸失て。鞘破れうて。恥く拔放ちて。内を相るふ刀ふ亳も鎬ふ
らゆ夏るふ寒ふ。稀世の名刀。小鍛治が小烏丁將鎮邪が太阿龍泉とも。是ふ優
さゞと思ふ可の鐔ふ十六言の記文ありその文ふ依。弓馬之力不料所得。狙公之刀
源季基と鐔着てありければ。いよ〻疑ふべくもあらず。皆共侶ふ嘆賞して。照文刀を
鞘ふ收めて。大法師ふ返して。ふゆ。這名刀の來歴ふ口碑ふ徴べる。ゆ。道德ふ少
知りぬ。ゆ。犬士達ふ知ざるべし。星額長老も聞召れよ。卑職総角より時。親そ
ふ輝武の夜話ふ聞るとあり。むり。先君季基朝臣上毛の御館ふ在せ。比有一旦近

名刀名將
暗ふ
狙公を拯ふ

習四五名とゐて射獵の為に遊山するに其頭る蕃山の麓に底不知と唱へ做す池あり。その老こる松両三株。池畔に鋸系柱こるその樹下に狙公とおぼゝ紀漢子株に臂を凭掛て身單睡俯ーく在り。李基朝臣い蕃山より麓に馬を找んとそ。迥に其方を見且ー壬ふに件の漢の頭の上に最怕るべき蚺蛇在まりそゝ軀の太うに千載の松に異るゝ。件の池より出こるゝ。頭ハ松の杪に在りて尾ハ水中に隱れこるその長紀と推て知るべ。眼を百錬の鏡を雙掛さる像く口い血と裝りー盆に似て長舌こる舌い閃く火焔狹と疑こる那漢の身飼の猿猴ハ駭怕れて逃んとすれど絆に援れて悶掻く程に。大蛇に呑れけり然ども大蛇ハ呑不飽。又狙公を呑んとて那松枝より頭を下して口を張り舌を吐紀既に近つく程に怪むべ狙公の帯こゝる腰刀忽然と脱出て見めた升こそ件の大蛇を遮り制めゝ所んを。大蛇ハこれに勢ひ撓こそ松の籔系茂に躱れて出ず他退げ刀も亦自然と鞘に返り入り因一霎時あるて又大蛇ハ頭を伸して呑んとすれば腰刀も亦鞘を出て衝ず閃

ふと始の如し。李基朝臣ハ一町あまり蕃山の脚に馬を駐めゝ這前未聞の光景を。うち長覩て在せ。俱に駭怪こゝ。伴當とそこゝに。若們他とよくこゝる狹刀劍の身を衛まる。素よりその德あるとのべども。那漢子の腰刀ハ就中世に稀こる神宝にそあらんずるも然ばとそこゝ過さば惻隱の情こるに似ゝ。いでや拯て救はんず。と宣ひゝ。上掩の獵箭二條拔含て。前略を量り馬を找めゝ弓に箭刻ふゝ。ものに大蛇ハ猶も狙公を呑んとて又頭を伸を。李基透さず弯固める矢聲を發て漂と射ゝ寛錯ゝず件の大蛇ハ右の眼を俄深く射られて一霎時も堪ず仰反り。李基箭刻速こる煅煉れば二の箭に大蛇ハ咽喉を射さゝ。共に裏決く躬所の深痍こる弱りて松の杪より撞と隊まで死ける。狙公ハその响ち驚こて覚れども既に蛇毒に觸れば舌さへ強りて舞立ず小程に李基朝臣ハ伴當とそて狙公に件のよーを告知て。开ず身邊に馬を找め腰附の茱に龍る。鮮毒の丹茱を賜りければ狙公ハ稍

これを聞へ我れ復りてその言を听那大蛇の死るを見て駭怕れ且歎ぶこと大なるに堪ず。
小可ハ何が一村る朝暮七と喚做す。曾鈍の徂公ぞ。今日の近御る御長許。
厩祈禱ふ招れ祝壽酒ふ醉されるかへさふ這頭を過る程ふ憶ずも睡臥ふけん。
後のゆと覚ず。倘相公の武勇をもて拯せゆふあらばこそ。猴を喪ふのみならず。
身も大蛇の腹内ふ葬らるべきーふ現再生の御恩徳孰の時ふ報ひまつらんと思へ。
幸ひ一けりとく感涙坐ふ吐むまでふ俯拝をしつけるを季基然てそと點頭ひて。
とよ。你が死ざりーいその腰刀の奇特ぞ。我大蛇を射て殺ーい然る後のゆえか。抑你が
その腰刀ハ世ふヨりも名物なーえ父祖傳来の什物歟然ぞ。你が買合なる歟甚麼
そと。問ゆへ朝暮七答て然ふ這一刀ハ親の時より持傳へて。猴を傭ーふ生ば毎ふ
腰ふ帯ハへども大刀拔く術も知らざれば況刃の好歹を辨へるゆひぞ。倘御所望ふハ
一命の御恩ふまの刀を献りふん。惜むべもいつぞ。とふふ季基歎びゆひて。あらぶ價を

合せんぞ宿所へ来よと召具して御館へ還るゆ程ふ其頭を過る壯客ふ有一趣を言示
さて。件の大蛇の亡骸ハ那伽ふ焼盡ーく灰を田圃の肥ふせば。效あるべ。と課ーらの美を
傳へ美る。近村の民胆を浅ーて且歎べも大なるを。相公の武徳を稱讃ーて。儀の如くふ做一
けるふ。その明年ハ田圃の實ハ殊更ふ宜ーかりーとぞ。事の便宜ハ見のまるぞ。件の池ハ昔より
主神あれば。とく村人怕れて網を下さぞ。釣もせぞ。夏ハ旱天の折ゆどもその池水を田の用水ふ
援とて要せざりーハ宜ふ亀益の大池なりーふ是よりの後人憚らぞ。或ハ網をもて鯉鮒の漁
猟の利を得ゆ者尠ーぞ。或ハ池の四周ゆ水浅ク処ゆ蓮慈姑などを植て賣買を做
ふ者あり。又水匠ハ稲田ふ這池より援沃ふ引ハ娯一貌も鳴く蛙さへ領主の徳を仰
ぬもるければ。近村の民相稱へ。武徳の池とぞ喚做けるゆ。是後の話なり。然ハ又徂公朝
暮七ハ季基朝臣ふ従ひまつりて。応躬く御館へ参りーハ。季基隨即近習をもて他ハ
腰刀を合寄て。拔放ちて見のふ退蛇之神刀とふ五字の銘ありけれ。ゆる疑ふべくもあ

猴牽の名刀は安房の里見の重宝なり〜白石先生の筆記に見えたるを借用し看官原据あるべし〜

也。奇貨とけうとそ。即便其刀の價として。金百両を令〜せのべ。朝菖蒲七日ふ〜まぐふ。欽び望の外に出る。一期の福徳なの上なり。と受戴なり。直に小可猴猴を大蛇ふ呑まして。生活の便着ふ〜ぞ〜りーと慨ち〜思ひ〜ふ然る東西とは知ざりける刀の價ふ這様業色百枚を賜るは。御恩ふ御恩と重られる。ん慈悲ふそ〜はれ是ぐふあれば猴牽く枝を生活ふせぞとも。旦夕安く老と送らん。這御慈善の餘慶なり。我家長久御子孫敏糸目千秋萬春萬々歳と。壽詞を轉り。欽びを直に酒さへ賜りて。前も懲ア〜ぞ〜十二分醉と盡て退りける。朝菖蒲七日の下ふ話り。倍而季基朝臣は件の腰刀の表装を改めく。思ひの隨に造らんと。狙公と名つけあひて愛玩して一日も帶のあ〜ぢふと〜りーふ季基は。れぬひ〜折狙公の名刀も何人のるふ落さけんあるとも知ぞりけふを。瀧田の老侯一二の功臣杉倉堀内は見覚なれば君臣閑談の折々ふ迭ふ其の義をいひ出て。いと惜をぬひ〜とぞ今は居まるの年を歴て。名とぞふ知るの稀なりんふ先君の御送骨と。

共ふ件の名刀の料ぞも又世ふ出る。正ふ菴主の家裏ふ〜せのふ一大奇事と両館のん欽び然りそと推量ちそまられば我々さへふ面目あり。併宝珠星額両大徳の賜ふて菴主の功徳ちふ及べ。有〜ぞ〜れまで辰ぞ妙造化ふそはられと一五一十と解示ぞ〜ぞ〜刀の来歴分明られば。大の欽びの〜ぞ〜ぞ〜七大士々も信の耳新ふ心地して。貌と改め膝を找めく。照文と共侶ふ又佛壇ふる先君の送骨を齊一拝ぞ〜りて。當下照文い、大法師ふ商量ちく。五十金と布施として。星額師弟ふ薦め與ふ君侯父子のふの年来施を好ぞのふ〜りと送骨送刀の欽びを叮寧ふ演る程ふ、大法師も両館より寄ぞのふ経巻と香奠を令る寄て。倶ふ星額長老ふ贈りくふ。拙僧は一所ふ住ふく。今一番故郷へ還り住れば是ぞもの東西はせん方なり。願ふは長く貴院ふ留めく。先君並ふ先亡の為ふ廻向を做ふ〜ばらよく幸ひ〜ぞ〜ん〜かーと憑むと。星額うち听て。出家は無慾を心とは。一鉢の齋一領の衣鐵を凍されば足れりとぞ〜。

偖れが是彼の財宝を拙僧も亦要るけれど貴捨と一歩けば椎舜々ふり返れば又思ふも
あれば姑く與りのみと答て件の五十金を財嚢の俤ふ項ふ撼て懐ふ楚と收め又香
奠と巻軸ふ両箇の秋児ふ分ち裏そ徒弟们ふ遍與りけり浩処ふ小衆屋より立
四個の小厮们が最大なる籠児二荷ふ椀家伙までも含納る蔬菜の書饌をもて
来ふければ代四郎紀二六立迎へて庖湢ふ擔ひ入さそ含出て主客十一口の法師们と
照文と七大士ふこれを差め次ふ代四郎黠兵の毎及紀二六以下の伴當まで送も
るくさうべ果ーるが又椀家伙を鹿児ふ收めて持ーて躰て小衆屋の小厮们を返ーけり
介程ふ這頭四下る窮民乞丐ふ昨夜街衢ふ掲示さて施行のよと今朝歩知
て時分と料りく陸續と、大庵へ来ぬる者蟻の甘涎附く像く幾個とふ涯を知
らぬ豫期ーるるれば代四郎紀二六両隊ふ分れて伴當们ふ米料を黠兵を銭を
含ーまるふ絶ふ半時許の程ふ漏さず施ーたりければ殘る銭米ハ一両人ふ含まぬ可ふ

るりふけり偖りー程ふ一個の衰老法師の鼻ハ損ね足も瘸るる竹の杖ふ携ひて辛ちく
来ふければ紀二六みづから立迎へて招ひ左見右見て和尚ハ脚の不便られを詰歩るこの
遅りけれども為ふ彼ふ果報あり施行ハ目今盡処ふて一両人分殘りて定りヨヌけ
化ひ方便ふそひ然あらば是ふ賜らんとひらひて麻の紉附る茜染の頭巾と含出て啓
くと奴隷がありて殘る米と一粒も漏さず楚と料り入れて銭さ四五百文殘りーて卒
とくそう俟含れば衰老法師ハ笑ーひふ銭も一緒ふ椎勝けやと拾駝て亟ふ去る
ぎ為ふ那這と云ると紀二六訝り聲苛立て鈍や這ヒ丐坊が施ーとさふ受さらば要る
らんふ疾らるまやと叱ると听ると冷笑ひて酒家ハ左まれ右もあれ刀祢連るとて疾ち去で
幾まで狹這里ふ在る知まで這城の下る通ま奇山逸匹寺の住職と徳用和尚と
咽做ーて。彼ふ今番這里ふ庵王が法延供養ふ他们を請りて偖る施行の

竺えあれい。徳用和尚怒りを沼堪ず子院枝寺を徇示し城内一二の權臣る。檀越を訴へ。大勢をのそ推寄く。搦捕んと隊配を信れば僧俗數百の大敵。今目前を起らん。
そ。開を避ずて。敗を等ば柴薪の上を巣を造る燕々を似て愚魚を釜ずのよと庵主を施主達を疾禀しを施行の報ひを告げ居る疑ひをひそとらひ捨て又杖を携て脚を曳々かつ行くと怪しと目送る紀二六代四郎。胸安らねばうち連立てもく芽を注進し。大照文七大士們を事信ると告知まると。大い听て眉を顰めて。開を
ろ行ぬるべか。約莫今番の法巡供頼に我獨力を做まるべき。當城の先主を結城氏と首として嘉吉を陣歿の列將士卒の菩提の與を為ん事と非如那里告ぐも。歡る兒筋るを開とらるを罪として搦捕らるべと理論を照文七大士們も共偽を點頭て大徳の意見理りなるを必偽の錯誤をすべんずとを星額長老推禁めてさる宜ひそ善悪邪正を君子小人の取る所その用心同じ。抑逆匹寺の

住持徳用を便佞を世智を長ずを是をのてさる佛学あるをねど俗の視聽を傾る。談義説法を口をあ。加旃出家を相応かを武藝を好て且その膂力角をも拆くべ。恁れ〻むりの辨慶とも他ゞ右を出んとかさ〻ぶべと人みな思へり遊莫小人の癖る
れも當城主の香華院をく。その地第一の大刹れば七八箇の子院あり又十餘箇所の屬寺あり皆是同氣相求る奸佞の賣僧下風を立く。枝葉院を住持をれらの故を城内なる諸侍を檀家甚しく就中結城の家臣長城枕之介逆利堅名衆司經稜根生野飛雁太素頼ゑと唱做き三士を先代よりの家幸筋をく。大父孰も喜吉の役を戰歿の老黨之れば結城の家再興の初より他們を職禄人を超て俱を兵馬隊長の上席をり。れども相似る。無学俗骨を胸廣く風小人れば先祖の忠義を鼻を揖て傍若無人の挙動ヨヨろ然ば件の徳用と師壇の交り浅く素より暇ある

身ゑれば。拘児を牽て隼鶻を放つ。遊獵を事とす。酒も飽とは共倶ゐ那逸。四寺ゐ参詣し。住持徳用と武を講じ。人を誘ひて樂しとも。殘忍を斬心の暴雄ゑれば。必徳用を相資けて。這方へも打向ひ。あらゝば実ゐ大敵。今更いふもあらねど。庵主今番の追薦供養ハ。單ゐ里見殿の兇與ゑれば。敢他人を雑へずして。悄々の修行。好とはいへども。憖ゐ施紡の報條を。城下の四巷ゐ布れ。故ゐ立地よ人ゐ知られて。這狹危を釀し。寺を造り僧ゐ施さハ。只是有漏の縁ゑ故ゐ。達磨の取らぢる処ゑ。以あるかを。施紡ハ富裕の慈善ゐ。淨愛の義ゐ庶れども。又名聞ゐ似ゑるもあれば。時宜ゐ。よりて用捨ゑべ。と憚るゐ言ゑ。施紡の一事ハ。過て及ぬ各位の千慮の一失。後悔ゐ達べ。ゝば。誠や唐山の常言ゐ。三十六計走るを。ゝ最上とは。とゝふゐ。ゝ。ゑく立去りゐ。ゝ。危紀邦ゐ居るゐ。ゝと。利害を談じ。得失を説く。教諭丁寧ゝければ。大家驚く。開ぐ中ゐ。大法師ハ沈吟して。頭を抬げ感服して。長老の示教道理ゐ稱へ。一切衆生。自他平等。只結縁ゐ任ゑ。

ゑ。如来の本願ゑ。ゝのを。愍ゐ他。施主を討ると。ハ。利を謀る是名聞ゐ。庶げ。ゝ。他領ゐ。奪を締ゑ。ゝ。今番の遠忌追薦を領。主ゐ。ゝも告ざ。ゝハ。現拙僧ゑ。行心ゑ。ゝ。甚ゑ。ゝ。ゑ。ゝ。ゐ。後悔涯ゑ。ゝ。ゝ。ゑ。ゝ。照文然ゑ。ゝと。尉心め難て。倶ゐ頭を。ゝ。大士ゐ。意見を。ゝ。れば。道節勃然と。膝を。找めて。今ゑ。ゝ。雌々ゑく。何を。ゝ。按せ。畢竟施紡の。一條ハ。我々ゑ思ひ起して。萬ゑく。做ゑ。ゝ。ゑれば。我々七名。踏留りて。寄来る。悪魔を。刈拂ハ。蜜崎。和殿ハ。庵主ゐ。倶して。ゑく。當所を立退ゑ。ゝとゝふを。照文ゑ。ゝ。ゑ。ゝ。ゑ。ゝ。ゑ。ゝ。咱々ハ。和殿達を。招會の。御使ゐ。擇れて。偶環會ゑ。ゐ。ゝ。今事の。危窮ゐ。及び。縱大徳ゐ。倶ゑ。ゝも。捨て。那里。狹退ゑ。ゝ。只命運ゐ。儘せ。ゝと。惴ゑを。信乃ハ。推禁ゑ。ゝ。議。寔ゐ。理ゑ。ゝれども。案内知ゑ。ゝ。敵ゑれハ。留ゑ。ゝも。退くとも。安危ハ。ゝ。定ゑ。ゝ。我々ハ。左ゑ。右まれ、大大徳ハ。先君の。御遺骨を。衛なりゑ。ゝ。一二の勇士。相倶ゑ。心許ゑ。ゝ。ゑ。ゝ。我々義兄弟七名の中。一人和殿と。倶ゐ退ん。推辭ゑ。ゝと。諫れば。照文爭ゑ。ゝ。ゑ。

ぎ。ぞう。ぶくの議に従ひけり。登時信乃は凜〻く。佶と儛を乞くて。犬阪和殿は。智嚢に富み。極て宜に主意あり。快隊配を定めぬ。とられて毛野に毫も礙議なぎを不吾我と。

て。兎身は。異なる。浪策をけれども。寄隊大勢なりん。奇兵をもて。敵と分ちて。一時に拉ぐ。和角の戰に。心許なく。今愚意とて。計んに。蛮崎生。伴當共侶。大庵王に。従ひて。関宿路へ立退べ。犬塚和殿と。蛇雪と。蛮崎生と。相資けて。赶る敵を。防ぐに。萬に一も。過なくん。又犬川大田犬飼に。精兵二四名を。従へて。這里を。距ること二四町。東の茂林を。有に。其邊なる。樹の枝に。紙幡を。掛け。多勢と見せて。敵の。先鋒を。疑せ。その。撓むを。報て。捕るべ。又愚弟に。犬山大村と。共侶に。殘る。精兵を。相従へ。這草庵に。火を。放て。煙を。揚て。敵と。分んに。もれども。敵も。亦。間諜兒。殘のく。這方の。虚実を。窺ひ。知るこもあれ。縱小勢と。知るとも。一人當千なるも。あれば。討退けんに。易からべ。その。餘のは。談に。固様なく〻と。意表を。送るく。解示せば。信

乃道。即荘介。大角は。小文吾は。皆共侶を。好と。稱えて。先鋒兵の中。両個に。課て。敵の動静を。探ること。城下の方へ。遣りけり。小程に。代四郎は。件の軍議。どち。聞て。倒に。欽ぶに。找出て。難もるを。恁らで。無礼へとて。叱られもする。孩知らねども。小可偶故。主に。逢て。今。その。危窮に。及ぶ。折柴。捨て。阿容〻と。安房へ。退りなるに。憚りなく。本意なく。らに。死なるこも。生るこも。共侶にとて。思ひ。願ふに。その。仮留置て。道に。即ち。隊に。隷こと。いくぐく。と。切る。願ひと。道節。聽に。聲を。立て。そは。亦。盃の口。誼に。御酒も。既に。ざるに。欽和老も。今は。里見の。家臣。我々と。朋輩なるに。私情を。演るに。その。義に。違て。最。烏滸へと。窘れば。小文吾。荘介。大角は。共侶に。慰めて。皆云云と。論すに。代四郎。才に。兼伏なく。俱に。准備を。為けり。當下。信乃は。庵主に。向て。大德に。御送骨を。衛て。當所を。退ぬ。俱に。まあ。せん。出ぬ。とられて。大に。一説に。及ぶに。未子。基王の。骨垂と。狙公の。名刀と。笈に。藏めて。脚袢を。着けて。草鞋。穿締め。笈佛を。搭駝て。出ん

と奏る折星額師弟とそろうて長老今番のあん好意い千萬言も謝申かたし。
縁竭まい異日亦再會の折もいん閑話の側杖打れんかとゝく退りのゝりとふと星額
うち听て否。拙僧とゞらも置ーゆゝ寄隊近つゞ立迎て和解めそ垂事と相計いんそも
亦出家の役ゐれいとふふ、大い點頭て又道郎们かうち向ひてふまゞぶゆゝねゞも好ゝて人をゐ
傷りゆいそ一個ゐりとも敵と殺さい日屬の作善空とゐて自他の功德と喪んあの弐を
忘れゆゝるとゝ諭せい道節うち笑いてそう亦垂理ゐ軍令ゐ哉兵ゐ原是凶器ゐり今
大敵と戰んゆ殺さで克と會ん勿い最做ーくゝ呼ゐゐ近曽大江親兵衛が武功を
傳聞るゆ富山ゆも舘山ゆも弐千百ゐ兇黨と一個も殺ゝ降伏ゐる例もあれば
左も右もゝとふを莊介推禁めてその弐咱们い肯ひうゝり何とゐれい人い各ゆゐるゐあり。
泊ざるゆあり大江い仁字の玉ゆ應ゝそ性仁恕ゐゝんのゝ他ゞ仁慈ゆ及ゞぎとゆ久立
優る所もあゝん非如教ゆ違ゆも饒ーゆゝとうち陪話れゞ小文吾現八大角ゆ共倡ゆ

笑扃ゆ入りて宜ゆ是ゆいゐれゐ出家い出家の作ゐゐ。武士い武士の進退ゐ。閑
戰の方いも只我们ゆうち任ーてゝく退りゐひゝかと合る間ゆ照文代四郎及大士
们もし礼服とゐゝ脱て袱児ゆ裏て軀て照文の伴當ゆ遞與ーつ。身ゝ固ゆ所軀
纏臑有い現戰世の沿習ゝ倣る折ゆも武を磨く准備ゆ脱落るゐけゐ。浩処ゆ両
個の覇兵ゐ城下の方よりかゐ来て七大士ゆ報るゐゐ。小可们ゆん指揮ゐ從ひて那這と
徘徊ゐて敵の虚実を張いひゝゆゝ。その勢力二三百もいゐ大將とおゞーゐゐ狩場將衣東
ゆく騎馬るゐゐ。綾菌公立と載ゝて笠則を駝ひ弓を携ゐ甲乙二騎ゆん井ゐ伴當と
おゞーゐ二三十名ゆ過ゞいゐゝ他们ゆ半纏脚袢ゆ列卒縄捍棒ゐゞを引提ゐゐ
餘い猛可ゆ驅催ーゐる土兵ゆやゆゝんぎゝん敗ゐる武具を着ゐゐ。仐もゐゐもゐ交
ゐゝ竹槍或い連枷ゐゞゞ携ゐゐゐゐゐ既ゆ也ゐゐ立ゐれば推寄んと程あゐゐ。
御小心いゝ。と言語ゐ急迫ゝ注進ゝ大法師ゐゐ听ゐゐゐん衆ゆ拙僧い衆議ゐゆ

草庵を自焼
あるを七大士
敵を分ち

諸行無常

まゐ退るべし。犬士達武勇を貪りて。衍徳を敵退ゐ打捨て。引返せと勝とまべし。
よくあのへと期と示ゐ。星額師弟ゐ別を告て。笈と揺揚げ錫杖と衝立ゐ出てゆく。
左右ゐ従ゐ照文代四郎。次ゐ蛮崎の伴蔵八九名。信乃い迺殿。て徐ゐ後ゐ。続いける。
尓程ゐ壮介現八小文吾い。野兵四名と相倶して。石塔波の邊ゐ四方の紙幡を含ゐ
おろし野兵ゐ遮與して。東の方へ赴ゐ。登時星額長老師弟い倶ゐ。莽と立出ゐ。寄
隊の近つくを。程ゐ毛野道ゐ。郎犬角い倶ゐ。その隊の野兵ゐ下知して。草布い白張と。て
安房より遣しを。敵ゐ乱暴せられゐば。後々までも。瑕瑾ゐ。その餘の佛器も。漏さ
ぬゐ。皆庵中へ含ま入れて。焼草ゐ。世ゐ。といそぎして。躰て。煙と。颺ゐけ。嗚呼。歎ゐ。濁世の境
界。不善の小人ゐ。ゐれば。沙門の忠信。大功徳ゐ。八十許日の念佛場い。脩羅戰諍の巷と
変れる。流轉向ゐ。生死の海。迴ゐ。結城の郊外。嘉吉のむかと。今ゐ。照ゐ。樹間の。苔石。蒼
浅くゐ。犬士ゐ。才畧勢ひ既ゐ。決然ゐ。武勇と感ゐ。野兵們い。皆。憑しくゐ。思ひけ。

第百二十五回

逆足寺ゐ。徳用二三士と謀る
退職院。未得名詮諫て。不得

単表。這結城の城下ゐ。通。元奇山逆足寺の住持。徳用い。その朝憶ゐ。大が
念佛供類の義と。他ゐ。拈醋ゐ。得勝ゐ。猛可ゐ。子院屬院ゐ。任僧們を。聚
合。支徒々と。言示して。敦圍悍く。論ゐ。抑本山い。昔より。結城氏の香華院
ゐ。彼家累世の廟墓。這里ゐ。在り。尓ゐ。似而非頭陀。大とやらん。迂曽。這地ゐ。庵と
締び。嘉吉の役ゐ。戰死ゐ。列將士卒の菩提と。倡て。一座の石塔婆と。建立。出処
不定の禿驢と。取ゐ。て。念佛供養ゐ。施行の報條を。衙衢ゐ。貼して。恩と
貪民と。児們ゐ。施さんと。欲ゐ。只是。鳥獸の所行ゐ。畢竟我寺い。て。領。王
結城殿と。も。茂如ゐ。ゐ。庁。結構ゐ。の。肚裏料りかと。寔ゐ。件の。似而非頭陀。安房の
里見の。舊臣ゐ。故主ゐ。代りて。追薦の。法。延ゐば。他人を。雑へ。安房より。代香使を

達られて里見の士卒二三十名来會まつと風聲あり。巷談ながら施行の報條の證據
あれバ紛れもなし。早く領主へ許して理非を糾明せざるもあらバ何をかくその後を懲さん武門の
恥辱寺佛家の瑕瑾忽諸にすべからず各這義を思ひずやと席を拍て罵言ボせバ本山の侍
者なりける禄釋坊堅削と喚做も惡僧衆議とるも突然と杖を出て答るやう現
御欝憤の事の趣道理至極なれども然ながら兵書にも兵ハ拙速を貴ぶといへり
あのその計巧久しきを佳とせず今ゆる長詮議して。その議を領主に許五
ば憶むも時日移りて他們ハ他御へ走るべし。あらんも常言にも聞諍果ての棒ぞ三昧
よ世の胡慮なるらんのミ因て惜地に思量るに幸ひなるかな本山の檀越なる堅名根生野両
兵頭ハ追鳥獵の與にとて今朝未明より城を出て程遠からぬ野邊に在りと告たれ
者のいへバ弟子隨便人とりて那毎にゆりと告て快来會を請しバ時を移さずまゐらん
べし。御商量いかがしとて詞らまず訖らぬ結城の家臣とゆえある堅名衆司經稜根生

野飛鴈太素頼ハ堅削が招ぎにより伴當列卒を相倶して鶻を鷲狗を牽し野猟
装束の儘にして野邊より這里に来まければ徳用銭ひ斜ならず聽て堅削にも出迎へ。
與議の席に招ぎしが經稜と素頼ハ伴當列卒們を門内に住めてそが儘堅削に
ひ引れて徳用ハ對面れ子院屬院の法師們ハ席を讓り上坐に請薦めて寒暖を舒て
叢るにぞ祝しける登時住持徳用ハ送の口誼の果るを竢ずして經稜素頼にうち向
ひて件の事の趣を辯舌尖鋭く演知すると両士ハ听々推禁めて其義ハ儔に禄
釋坊より告られしかバあるなる因て伴當に吩咐て巷頭の風聞を揣さしに安房の
里見の兵毎が那頭陀に大に唆誘されて今番の法事を執行ふとの下口既に紛なし
縦その事實にても嘉吉に戰死の列将士卒の菩提の與る法會なるべしと我君
侯に告稟して己前に免許を請奉るべく當寺へも慇々と示して帮助を請ふべきに
議こなるをその義に及ざりける他們が烏許の挙動ハ饒むべくにもあらねども今ゆる告

許の時を移さば敵あり遠く逃亡てん然る時は六日の菖蒲十日の菊ぞと悔しかるべし非如許亦きぞ今忽地に捕るも他們は非法の尷尬児疎忽の咎あるべしぞ我們両個長城と倶に三家は結城譜第の重臣先代忠死の児孫なれば各覇兵一百名を與けられて倶に是兵頭の上席に位せば兵權を振ふべきなれども去の義と知ざりければ伴當列卒們のごとく覇兵を一個も倶して来ぞ然れども城内へ還りて覇兵と召聚めて人の為に訴られて且時も移るべし故に我們商議して悄地に一個の伴當を城内へ走しかしく則長城枕之仆に支の趣を告知しる箇様々々に枕之仆とやくとろろく那身の覇兵百名を倶しく力と勢せんとのら信ぶべ程なく来會ぶべ又近郷の荘客們に緝捕ゆと徇示して猛可に土兵を駈催したりければ他們も我隊狭出く来て是に加るに本山の子院屬院の男僧と道人們を用ぜられるべきなる二三百名の射方の兵越にあり案内知ぶ事な

ぶべ悄地に那首へ推寄て短兵急に拉ぶ嚢裡の東西を探るに像く一個も漏さず搦捕らえん惴利並に近郷の荘客們の来ぬるを待く諜し合せて部を定め旨屬の武談虚しうぶべ器械含て覚るべ法師武者とて憑しうあ准備どのそだのへかと答て倶に説誘ふべ徳用堅削いべらく這席上に在りと有る破戒無慚の衆徒兇僧拯び勇ざるべく且素頼経稜に酒杯を屬めて云云と相譚ふ程に長城枕之仆惴利は素頼経稜に告られく這義を少知るより一百許の覇兵と倶しく城内より出く来ければ素頼と経稜は囲坐の席に招容れて住持徳用共侶に大家ひとく面談も惴利ことを聴あぞ現那責僧に大が事は同僚達に告られてその山星略を少知れば又ふも及ぶべ少がどれは這奴們が鳥滸所なれ倘是とも忍ぶべ孰を刃心ざるむ咱們は緝捕の准備をく覇兵を送るく領て来れば各隊配甚麽ぞと問へば

経稜素頼へ俱ふ答く然ばとよまの爰咱们い不用意ゆく従ふ暇兵ゆーざれい這
より〜く程遠〜ゆ荘客们ふ徇示して猛可ふ土兵を駈催〜うければ時を移
さぐ咸来ろべ。是ふ本山内外る法師武者と加まべ既ふ四隊の雄兵ゆ却又
那里の法會ふ連る里見の士卒ハ三十餘名。その餘い庵主と資けぬ所出処不
定の禿驢のこ其も十人ふ過ぎとゆる。尓るとと躬方のヨ勢とりく八方とりく捕
綢るべ。那奴们萬夫の勇ありとも捕漏さとあるべ〜ぞと惴るゝ徳用推禁めそ开ハ
勿論のとるがう事い成かくまそ。洩易うり非除里見の士卒们を送るく摘捕
るとも。奴而非頭陀、大と走らーるべ。後々までの遺恨るらでや今患意とそ
せんふ堅名主根生野主い。土兵と相率く本街頭より推寄ゆ堅削是
副とうて子院屬寺の衆徒道人と。半分いその隊ふ相俱〜く宜く先鋒ふ
找むべ。又長城主い隊兵と領て間道より先ふ找ぐく。他们ぐ敗れて走ん折开ゞ

去向を捕綢く刺挾えて殺るゆゞ漏さぐゆるぞ但〜武井の這方ふ岐路あり。正
路い関宿より木下風行徳ふ到るべく开ゞ岐路い江戸へもくべ。信れば又拙僧い當寺の
所化と道人们を従〜く長城主と共侶ふ悄地ふ先へうち出て那岐路ふ敵を待ん。
武井諸川の這方ゆ知るべ。細流ヨろ下流い利根河ふ相通ト関宿より
両流の一箇ハ松戸新宿より別れて戸田河と做るゆ有信ば去向ゆ津もヨろ不知
案内の敵るれば進退不便推て知るべ。あの爰い誰何とるふ合るる像く。鼻春蟲ゆ
ゆく解示せば大家理ゆと稱えるぞ中ふ長崎惴利い件の一説をうち听て適愛
たる長老の説法死るゆ躬方ふ引道導いその圖ふ當りて精妙ゆ咱们い初度の隊ふ
會つゞ伏兵ふるゝんゆ勇士の本意るゝねども現ゆ二の隊ゆそ大事るれ咱身ゆ既ふ
准備して暇兵を送るくゆく来ふければ持ず火銃ヨヌくゆ。敵ふ援の兵ゆぞ来ふく。
倘ゆふ餘ゝば駁ゆ仆さん。ゆの爰もろろ安ゆ成べ。と噪ゞぞ蒼髯撥拂ゆゝ皆憑く

思ふ。却酒盃と行替しくるゝ云云と相譚ふ折ふし這近郊なる莊客ハ堅名
経稜根生野素頼ぶ催促ふ従ふ。走聚る者二百餘名。連枷。捍棒。
長柄の鎌と携ゝ既ふ當寺ふ来ふけるそのゆえゆければ大家ふ向ふ勢ひ猛て
卒然らべ快打立ゝ。徳用堅削衆徒道人准備ふ甲鎧衫ふ各
臂縛脛衣ふ身擐ふ器械。皆傍ふ引着て俱ふ部と所く程ふ本山の先住多
け。未得と喚做ふ老僧ふ。齢ハ既ふ八十有餘年来隠居ふ山内の別院ふ在り
今ふ一説と人伝ふ少知りしふ。驚ハて一要時ふ堪ぬ両個の行童ふ杖披
ふく必て来ふ住持徳用ふ向て涙と共ふ諫る。ゆくふ他郷の行脚の法師ふ當
城外ふ古戦場ふ。吉嘉吉ふ陣歿の列将士卒の菩提の與ふ為ふ念仏供養
施行の義ふ先伐寺ふ告示ふ。非除邦助と請れぎとも开ハ欲ハ所ふ人の好事
醋ふて屬院の衆徒ふ召聚會。武家の檀那ふ告譚ふて出家人ハ相応ふ

伐の説ふ及ぶ欲天魔の障事と謂ハ。且法會の願主、大とゆえハ安房の里見ハ舊
臣ふ故主ふ代る供粮ふ佐れば里見の家臣ふ武名欽来會ふ。吉嘉吉のむ
か一ふ竜城せれ。御方の列将ふ中ふ那里見季基主ハ我先館氏朝朝臣と莫逆の
信友ふ其の忠義ふ甲ひるければ當館成朝朝臣城邑再興の刑ふ。嘉吉ふ戦歿の
列将ふ義士の菩提の與ふ石造の地蔵菩薩と建立ふ。ふ中ふ殊更ふ大佛一體を
季基主の墓表と定ふ。ふ世ハ知る人稀ふ。我住職の折ふ。當寺の舊記ふ
紛れる。有徳ハ件の法慈ハ獨里見殿の與ふ。先館氏朝朝臣並ふ御方の列
将士卒の菩提と。ハ自他平等ふ。ふ沒ふ。ふ法會ふ佐ふ縱那義を當館ふ外ふ。ふ許
ふ。ふ愛惜せ。ふ。何でふ追捕の沙汰ふ。ふ。ふ根生野ハ二個の武士ふ。ふ
向て各位ハ格另ふ。ふ素ふ。ふ道理ふ両箇ハ。ふ。ふ那義と。ふ。ふ。ふ館ふ。ふ許ふて
こそ。ふ下知ふ依ふ。ふ。ふ私の説と旨と。ふ。ふ土兵を駈催。ふ僧侶の帮助借

細素と聚會て徳用魔談を凝らす

さて縛捕の准備何事ぞや忠孝あく義に違ふ傲慢の事免るべくみづから思ふべし
ねとそ這方を禁め那方を窘め理り切る老僧の某言口ふ苦ければ狂る馬ふ鞭うつ像くいよ
いよ怒る經稜素頼惴利も亦共侶ふ權威ふ乗る聲もひそ〳〵ふ余たりの言和僧ふ听んや
慈悲忍辱ハ佛意でも邦内邦の法度あり武士ふ武士の務あり壁言ハ那奴們言を設て
我先君の菩提年も吊奉るとハ〳〵そ人の憑ずまゐ法會三昧迺是我君と蔑如ふ為なる
非礼の狡猾許ぞ〳〵ふ烏滸ふる言と罵れば然と點頭く德用堅削俱ふ腕と扼りく
三檀越の言道理ふ稱へ當君景襄ふ季基們が義烈の戰殘を憐みのひて草標を建立
あり一折其義を安房へ告られぜとそ他が領地ふ建ふあるねば今番他們が這地ふ于て館ふ
免許を亶請ざる法施施行と同かぞ乱れる世ハ出家でも弥陀の利剣を頭ふ翳て天
子將軍園守領主あ與ふ兇徒を芟拂ふ山門の大衆南京法師先例ハ多くあり迂遠
る似而非談義ふ時後れぞ後悔ゆん敵ふ足ぞ立のぞと打厮鎗のあらく拂あ

さえ一ふ鳥の像く大家立と身を起ぞ猶禁へと推られども堰留難一水や空子剣
降て俗羅漢り出ぞ得心ふ悪僧俗ふ未得を撥遣ふ推隔て皆散動ふ外面ふ遅
ふ長城ふ殺兵莊客們及堅名と根生野の伴當列卒們迷ふ玄関近く側ふ
斉整て星列れ三士ハ佶と相亘て事徒々と言示せ大家都てふ中ふ近
郊ふ莊客毎ふ欲ふ料らぬ縛捕ハ古戰場ふ庵ふ念佛供艱ふ施行愛ふ那大願主
ハ大坊及来會の士卒も漏さぞ搦捕ふ欲ふ欲ふ筆て少知て且驚ふ旦ふ呆れる目を
注ふ言ふ出ふ然りとも思ふ催促ふ儘て俱ふ来ふる鈍ふ悔ふ数ふ既ふ
あふ至て脱るべふ己と紛ぶ徒ふ知ふ個ふ意ふ敗ふ法師
武者さ道人さ部ふ勇む去向の進退皆三門を出ると駈て經稜素頼惴利ハ各馬ふ跨て
二隊ふ分ふ二條路ふ暗歸と定め期ふ約ふ小敵と見て侮り思ふ那僧俗と送ふ捕漏
きぐとそいそぐ這段ふ長ふ長ふ雖も楮數言ふ定限あれば作者の自東成かく姑且

筆を輟るのみ。畢竟結城の三士伯。悪僧徳用堅削と共侶ふ。大並ふ七犬士を。搦捕ふ欲
者。這日の勝負甚麼ぞや。开ハ又巻を改めて本輯下帙の中に首ふ鮮分ると聽ねかし。
作者云ふの第九輯の始の腹稿より。巻の數ひとヨヤくるをのく。上中下三帙ふ相分ち。
又帙毎ふ上下ふ分ちて。凡六巻ふ出ぬ。本帙の首巻 十三之 十四 る。附言ふ既ふいへる如し。
就中這第百三十五回ふ説く処。七犬士伯が憶ひ。又厄ふ逢ふ綻深るを。
后まで分ざまで鮮分ざまで看官思ふ惑ふヨヤくりてん然ると今慙ふ茲ふ筆を輟
めるハ。唯看官の遺憾のみ。作者の本意ふあらねども。本帙ふ限るふあら
ば看迷ふもまるく。ふ後の樂ヨヤかるべく綴り送るも長々。沈筆の労を省くふよう
あり。然ばこの五巻を看く。第百十五回より上ふ。劣りふけり。とのむ君子い糠を舐
く糟ふと。ふ知らぬ。隴を臨く蜀の富るを思ざりける儔るべし。

南總里見八犬傳第九輯巻之十八終

文政堂蔵

○曲亭翁編演里見八犬傳第九輯下帙上画工筆工剞人目次

出像畫工　柳川重信

淨書筆工　谷金川　横田守　櫻木藤吉　鳥山某

剞劂　十五之巻　十七之巻　十八之巻　十六之巻並二補遺

南總里見八犬傳全輯

第一輯　五巻　第一回より第十回ふ至る　發端結城落城義実安房ふ流寓神餘並ふ金碗孝吉ふ本輯ふ在り
第二輯　五巻　第十一回より第十五回ふ至る　山下定包伏誅満呂安西ものの安房の大並ふ伏姫富山ふ入るの大輯ふあり
第三輯　五巻　第二十回より第二十四ふ至る　信乃額藏道節現ぬる世濃ぬるの大塚四塚芳流閣の段ふまで本輯ふ在り
第四輯　四巻　第二十五回より第二十八回ふ至る　芳流閣後段行德の段少文吾親兵衛出世大塚の後段庚申塚の段本輯ふあり
第五輯　六巻　第二十九回より第三十五回ふ至る　市河の段曹電山明魏山荒芽山の大段五犬士ふ集音音夫婦親子姉妹の本輯ふ在り
第六輯　六巻　第五十回より第六十回ふ至る　荒芽山後段朝谷村並ふ右濱の段毛野角並對牡樓庚申山壁返の段ふ本輯ふあり
第七輯上下帙七巻　第六十一回より第七十一回ふ至る　庚申山崇岩壁返の後の段甲斐の穴山猿石の段柏月院の段ふる本輯ふ在り
第八輯上帙五巻　第七十四回より八十二回ふ至る　二十村の闘牛小千谷の宿庁目の館諏訪湖並ふ青柳客店の段ふる本輯ふあり
第八輯下帙五巻　第八十三回より九十回ふ至る　大田大川が再尼の段穂北の段湯嶋の社頭の段司馬濱の段本輯ふ在り
第九輯上帙六巻　第九十一回より第百三回ふ至る　鈴の森並大坂大山復讐の段安房の稲村の城の段素藤ふの伝再出世本輯ふあり

文政堂蔵

第九輯中帙上七巻 第百四十四回より百十五回に至る 富山の後の段館山の城の段人不入山の段濃路姫の段親兵衛遠戸の段本輯にあり
第九輯下帙上五巻 第百十六回より百十九回に至る 不忍池の段両国河原の段素藤の伏誅結城古戦場の段等本輯に在り
第九輯下帙中五巻 第百十九回より百二十回に至る 是より下の作者の稿本いまだ成らざる故にその趣を注すべきなければこの中下二帙の
第九輯下帙下五巻 第百二十一回より百二十四回に至る 巻の数も回数も只大かたに準るのみ過不及あるべし明年改めて訂を録すべし

右八犬傳全部七十餘巻一百四十餘回明年刊刻満尾仕り候 並製本半紙摺りの外に賜顧の君子の御誂に儘一なりの鴈皮紙摺りに仕り大抵一輯一帙分を合巻一冊に製本仕り候へば九輯全部十二三冊に可成候 尤も遠国へ御進物或は御旅行の折或は湯治場などへ御携ひ被成候に道中嵩張り重く至極の御便利なるべくと存じ候 並製本も第一輯より六七輯まで刺画の満里堂板紛失致し標帛並に帙袋の模様板の磨滅及び候に先般悉く彫り改め候 製本孰も新板責出しの折の如く臺も疎畧なく折々摺廻し毎輯品切れ多く板に仕入置き候間本房並に向寄の書肆へ少に依て多く求め て後に世に物の本まで以来なる大部の類なるに付春日秋夜の御慰にもと思ひ候 板元書林文溪堂叢台

近世説美少年録第四集

第一集より第三輯三十回まで既に刊行し第四集三十一回より五十回に至る 本集五巻 近刻
第四十一回より五十回に至る 既に刊布し訖ぬ

開巻驚奇俠客傳第五集

胡蝶物語前後二編合巻世に行はれ因て曲亭翁にまた又この書を刊行せんと欲す 五巻 近刻

莊蝶翁再遊外紀第一集

李阜吾と山中一夕話の書ゆゑとのへどもあり戯墨ゆゑ翁の随筆なれば初学のなる補益多し 近刻

著作堂一夕話 大本五巻

曲亭翁精著八犬傳の一書は第八輯より九十九輯の下帙まで本房刊布の蔵板なりこの餘は浪花なる一書肆の所有なれども客歳七月の冬十二月第一輯より第七輯までの舊板を彼処より購ひ求め全部不殘本房の蔵板に成り候に依て その多く板のちりぢり失せるを補刻仕り製本もなべて初のごとく美本に仕り候 未刻の新書目録の左に演べる如くに本傳必明年に結局大団円に至りて その年より彫鐫の工功果しいたむまるべし又美少年録第四集その餘も右の目録に あるべし 翁の新編間断なく毎年刊行仕り候 四方遠近億兆のみなさま君子方々求めたまはるべしとかねてかしこまるものなり 大江戸刊行の書林 文溪堂再白

○内容あらまし 仙女香一つ 四十八文 黒ゆゑ美玉香一貝 四十文 江戸京橋南伝馬町三丁目 坂本氏

○家傳神女湯 婦人ちのみち 婦人病の妙薬 一包代 百銅
○精制奇應丸 大包代金弐朱 小包代 五分 中包壹分五厘
○熊胆黒丸子 一包代五分
○婦人びしの妙薬 一包代五分
製薬本家 四谷塩の坂東側目黒行道 弘所 瀧澤氏 元麻布中坂下南側四方みな店の向 大沢氏

天保八年丁酉年春正月吉日令辰發行
心齋橋筋博勞町 河内屋長兵衛
同 河内屋茂兵衛
書行 大阪 江戸 大傳馬町二町目 丁子屋平兵衛板